

三好 阿蘇 達治
みよし あそ たつじ

雨の中に馬がたつて いる
いつとうにとうこ うる
一頭二頭子馬をまじえた馬の群れが
いとうとうのくまのぐれが
あめ うま む
雨の中にたつて いる
あめ なか

雨に蕭々と墜つてゐる
馬は草をござてかる

馬に車をたべてゐる
せなか

かれ
くさ
彼らは草をたべてゐる

草をたべている
くさ
くさ

あるものはまた

雨は降つてゐる
蕭々と降つてゐる

山は煙をあげている
やま
けもり
なかだい
へだざき
き
おも

中岳の頂からうさ
あがくへり
そひ

空いちめんの雨雲と

やがてそれはけじめもなしにございでいる
うが へど
語は直ニニギニハ

馬は草をたべてゐる くせんりはま

あめ
あら
あおくさ

たべてゐる

かれ
彼らはそこにみんな静かにたつてゐる
レヂ

ぐつしよりと雨にぬれ
あめ

もしも百年がこの一瞬の間にたつたとしても何な
ひやくねん いつしゆん あいだ

あめ あめ
ふ ふ
あめ あめ
ふ ふ

雨は蕭々と降つてゐる

^出典『日本の詩歌 22

三好達治』